福竜丸だより
— 都立・第五福竜丸展示館ニュース —

(財) 第五福竜丸平和協会
〒136　東京都江東区夢の島３－２
都立・第五福竜丸展示館内
電話　(521) 8494

久保山愛吉さんの命日に想う

草野信男

Secret N-Arms Deal Alleged

NEW YORK (Kyodo)—The New York Times Sunday reported that Japan and the United States had concluded a secret, verbal agreement to allow the transit of U.S. nuclear arms through Japan.

In a front-page story of the Sunday edition, Tokyo correspondent Richard Halloran, quoting authoritative Japanese sources, reported that the secret agreement was concluded in 1960 without making the ... text of the agree-

Fujiyama, the then Japanese Foreign Minister, and Douglas MacArthur II, the then U.S. ambassador to Japan, in 1960 when the "prior consultation" arrangement was made simultaneously with the revision of the Japan-U.S. Security Treaty.

It is understood that the U.S. side put the verbal agreement on record in English, the report said.

The agreement allows the movement of nuclear arms to Japan ... consulta- ... bound for ... tationed ... report ...

impossible to deploy or ... nuclear arms in Japan.

—Under the agreement, ... arranged that only the U.S. ... responsible for the transit ... nuclear arms through Japan.

—According to the definition of "major changes" subject ... prior consultation which was made between Fujiyama and MacArthur, a "major change ... the deployment of forces ... cluded the movement of 15,... to 20,000 military personnel to Japan and a "major change in equipment" included the introduction of intermediate ... long-range missiles and nuclear warheads into Japan ... the purpose of using them here ... —Fujiyama and MacArthur ... the understanding ... changes," except ... subject

久保山さんの命日、九月二十三日が近い。一九五四年、その日、久保山さんは、東京の病院で、全国民の願い、医師の懸命の努力も空しく、遂になくなられた。ビキニ水爆実験後六ケ月余り、日本全土に沸たった原水爆反対運動の盛上りのさなかであった。

病理解剖が大橋成一博士（国立東京第一病院）の手で行われた。私も立合った。肝臓が強くおかされていた。後日の検査で、放射性物質の沈着が証明された。

それは戦場での被爆でもなく、戦争での被害でもない。水爆実験による、遠くはなれた公海上での、設定された「危険区域」外での、放射性降灰の間接照射による被害であった。

核兵器は十年の間に質、量ともに驚くべき発展を続けていたのである。

ビキニの水爆は、日本の津々浦々に原水爆反対運動を燃え上がらせた。久保山さんの死は更にこれに拍車をかけた。

三十年余りすぎた今、あの運動はどこにいってしまったのだろう。何故？

久保山さんの命日に、国民こぞって墓参することができなくても、せめてこの日を核兵器反対のための反省の日としたい。

＊

九月始め、ＩＮＦトマホーク艦「ファイフ」、「バンカーヒル」が母港横須賀に入港した。ヨーロッパで廃止されたＩＮＦが船で日本に運ばれてきたようなものだ。

国会では、例によって、野党は通り一ぺんの質問で、政府の「事前協議の申入れがないから核は入ってこない」という答弁を引出している。猿芝居もいい加減にしてもらいたい。

一九七四年十月、ニューヨークタイムスのハロラン記者は、藤山外相とマック・アーサアメリカ大使との秘約協定のスクープ記事（出所は当時の木村外相）をのせている（Japan Times 10・24、日本紙には記事なし）。それによれば、

prior consultation（注 negotiation ではない）の対象となるのは、"major change in equipment included the introduction of intermediate and long-range missiles and nuclear warheads into Japan for the purpose of using them here." である。

トマホーク艦の入港が「事前協議」の対象となるかどうか、英語の勉強がてら検討してみては如何。それにしても何ともうまくできた文章である。

（第五福竜丸平和協会顧問）

マジュロの小さな造船所

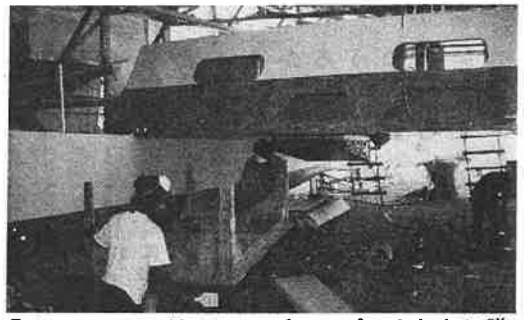
一九八八年八月　マーシャル諸島から

マジュロの小さな造船所で、一隻の帆船が建造中である。一九八五年、放射能を恐れ、メジャト島に移ったロンゲラップ島民を支援したのが、「グリーンピース」であったが、この船も「グリーンピース」からロンゲラップ島民への贈りものだ。

ロンゲラップ出身で、国会議員のチェトン・アンジャイン氏は、日本の医師への強い期待を語る。「ロンゲラップの人はとても病気が重い。わたしたちは、広島、長崎を経験した日本の医師、科学者に診てもらいたいと思っている。もし、来てくれる医師がいるなら、あの船でメジャトまで行ってもらいたい。船は九月には完成します」

イバイ島の少年。炎天下、ひとりゴミを焼く姿は淋しげに見えた。（太平洋のゲットーといわれるこの島にも、ロンゲラップ島民が住んでいる）

船の設計者は、アメリカ人のティムさん。ティムさんは、帆船造りのベテランだ。


「グリーンピース」からロンゲラップの人たちに贈られるという船は、堂々としている。完成は間近だ。メジャト島からビリエットさん（手前、被ばく者）が手伝いに来ている（マジュロ）。

協会理事会開く

九月五日、協会第84回理事会が学士会館でひらかれました。七月末亡くなられた檜山副会長を悼み黙禱を捧げたあと、①当面の活動方針②展示館運営の充実策③副会長の選任を主な議題として、三時間余にわたり熱心な討議が行われました。①の中では懸案である展示館の英文案内リーフレット、絵はがきの作成が討議され、それぞれ完成、原案の作成を急ぐことになりました。②の議題については、中学生・高校生の見学の顕著な増大がみられる現状のなかで、展示館の充実にたいし理事会が具体策をもってとりくんでいくことの大切さが強調されました。夢の島公園全体の整備充実という東京都の新しい長期計画の中で、展示館施設の拡充について、専門家による調査や検討をすすめ、都に要請を行っていくことの緊急性も話しあわれました。資料室・事務所の新設や整備、館内の空調・照明設備の改良、ペンキが剥げ汚れがめだつようになった船体や壁面の断熱材が剥がれ鉄粉が舞落ちてくる状況についても修理を要請していくことを決定。副会長の選任については、次回理事会でひき続き検討することにしました。

平和随想（三）

三宅泰雄

アメリカの時事週報、「ニューズ・ウィーク」誌は、その最近号に「核クラブ」(Nuclear Club)と題する特別記事を掲載しています（一九八八年七月十一日号）。

これは各国の情報機関、探査衛星、政治家、評論家などから、最近の世界、とくに「第三世界」の核兵器に関する情報を集めたものです。

記事によれば、すでに核兵器を保有している五大国（米、ソ、中、英、仏）のほかに、発展途上国のうち、四カ国が新たに核兵器保有国となっているとのことです。その四カ国とは、インド、パキスタン、イスラエル、南ア連邦です。

これらの国は核兵器（原爆と水爆）を保有しているばかりか、インドやイスラエルは、核兵器搭載用のミサイルまでも備えています。その核兵器保有数は、インドが十二個から二〇個、パキスタンが四個、イスラエルは一〇〇個以上、南アが二〇個とされています。

一九七九年に、アメリカの探査衛星が、南大西洋の上空で、二度にわたり閃光を探知しました。軍当局はこれを核爆発実験であるとし、すぐカーター大統領に報告しました。軍の情報は、イスラエルが南アの支援のもとに行なった核爆発実験と推察していました。その後、この推理に疑問をもつ人もあり、肯定する人もあり、事実は不明のままとなっています。

いまでも、インドとパキスタンとの間の確執は根深く、イスラエルとアラブ諸国との間でも同様、さらに南アはアパルトヘイト問題で、各国からきびしく糾弾されています。このような不安な状態が、これら諸国に核兵器の保有を決意させたとも言えるでしょう。

一九六八年は、核拡散防止条約が締結され、今日までに一三〇カ国が加盟しています。しかし、前記の四カ国は不参加のままです。

「ニューズ・ウィーク」誌は、さらに、近い将来に核兵器保有国たらんとして、鋭意研究を進めている国の名をあげています。これらの国々は、イラン、イラク、ブラジル、アルゼンチン、リビア、それに台湾だそうです。

台湾は、すでに原子力発電で、四四％の電力をまかなっている原発先進国です。このような国では、優秀な化学者さえいれば、核兵器を作るに十分な核分裂物質をとり出すことは、きわめてたやすいことなのです。

同誌はさらに、たとえ核不拡散条約の加盟国であっても、科学技術の進んだ日本、西ドイツ、イタリア、スペインなどの諸国では、核兵器はすぐにでも作れるだろう、とも言っています。

これに関連して、いま国際的に関心の的となっているのは、日本のプルトニウム問題です。日本はいままで、フランスとイギリスにたのんで、使用済核燃料から、プルトニウムを回収してもらっています。このプルトニウムはアメリカの許しを得て、日本に持ち帰ることになりました。

しかし、輸送中の安全性への懸念や、受け入れ態勢の不備などから、いまのところは足踏みの状態です。しかし、何れ近いうちに実現するでしょう。その結果は将来、核燃料として使うプルトニウムの必要量に比べ、はるかに多いプルトニウムが、国内に蓄積されることになりましょう。

この問題をめぐり、「原子力科学者集報」「Bulletin of the Atomic scientists」は、その最近号（一九八八年五月号）で、日本へのプルトニウムの輸送についてパターソン氏が、核拡散問題についてレーベンタール氏が、それぞれ危惧の念を表明しています。

私たちは、これまで他国の核兵器の廃絶と、国内への持込みの反対を訴え続けてきました。しかし、今では、日本自身を核保有国としないために、一層の努力をしなければならない段階に来ているのです。

三宅泰雄著
「研究室の窓から」
平和への願い／心に残ること、朝永さんと平和の問題、第五福竜丸のこと、ほか
定価＝千五百円・上製162頁
水曜社発行

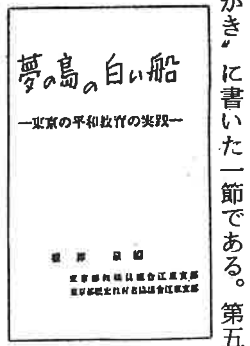
私にとって、いまでも、いつでも「夢の島の白い船」

ねぎし　いずみ

「〝夢の島の白い船〟——私たち東京都教組江東支部の組合員は、第五福竜丸をこうよんでいます。このことばは文字通り平和のシンボルである〝ビキニ水爆の生き証人〟第五福竜丸に永遠の平和のねがいをこめたことばです。……」

もう九年前にもなるが、一九七九（昭五四）年七月、私はそれまでの自分のささやかな平和教育の実践記録を合本にした九〇ページ足らずの小冊子を出した。この冊子の題字は高岡岑郷氏（現・都教組江東支部執行委員長）の書による「夢の島の白い船」であった。

前記の短文はその冊子の〝あとがき〟に書いた一節である。第五福竜丸と私との出会いはそう簡単にはいい尽くせるものではない。



一九五五（昭三〇）年四月。大学新卒の青年教師として私は新設校の「江東区立第三砂町中学校」（三砂中）に赴任した。奇しくもその前年にビキニ水爆実験で第五福竜丸が〝死の灰〟で被災した。そして、赴任したその年に第一回原水禁大会が広島で開かれた。あたかも私の前途を暗示するかのような教師のスタートであった。

三砂中はいまでこそ主要な通勤線の東西線「南砂町」駅前学校だが、三十三年前はアシやヨシの茂る東京湾の湿地帯が迫る〝陸の孤島〟。その間近に〝夢の島〟があった。

それにしても、〝夢の島〟とはよくぞ付けたものだといつも思う。〝夢の島〟という名の由来については、いくつかの説がある。

しかし、名の由来がどうあれ、かつてはこの夢の島は〝ゴミの島〟であったことは厳然とした事実である。都内の大量のゴミを満載した都清掃局の〝ゴミトラ〟が砂塵を巻き上げて走る。名状しがたい廃物の山と悪臭、子猫ほどの大きな野ねずみや獰猛な野犬の群れ、そして、ハエの異常発生。三砂中の教室にはハエ取りリボンが垂れ下がり、教師はハエ叩きを持っての授業。〝これぞハエ・スクールだ〟と苦笑したこともあった。

「沈めてよいか第五福竜丸！」

一九六七（昭四二）年三月一〇日、マスコミに第五福竜丸の保存を訴える投書をきっかけに、地元の江東原水協、江東教師平和の会、東建従（東京建設従業員組合）江東支部を中心に永い永い保存運動が始まった。

いつの日だったか、私は学校から自転車で夢の島に向かった。いまは無い「旧夢の島大橋」のふもとでこれ以上は自転車はダメ。泥んこの道なき道を歩く、悪臭のなか一面に枯れ草にひっかかっているビニールが花が咲いている？ように見える異様な風景。そのゴミの山の縁（へり）に廃船が横たわっている。その姿はまさに〝幽霊船〟のようであった。いまだにあの情景が私の脳裏に残っている。

一九七五（昭五〇）年三月。平和教育旬間をまえに、都教組江東支部は江東の子どもたちに、第五福竜丸の存在の「意味」と保存運動の「意義」を教え伝えようと、平和教育教材パンフ「夢の島の白い船——第五福竜丸のはなし」を作成、区内全教職員に配布した。

あれから、早くも十三年。今日に至るも首都東京には、真に〝戦争と平和を考える〟資料館が存在していない。そのなかで、「第五福竜丸展示館」こそ〝平和教育センター〟としての役割を立派に果たし続けている。

時折、展示館を訪ねて第五福竜丸を見ると、私は妙な気持ちになってしまう。

〝そんな狭苦しいところにいないで、あの時のように汚いけれどもう一度海に浮かばないかい。青空の下でのびのびしたらいいのにね。それでこそ「夢の島の白い船」なのに。〟

（元・調布市立神代中学校教諭、現在・調布市市史編集室勤務）